# 今何故、薩摩の郷中教育、会津の什教育が必要か!

# 一般社団法人郷什塾

約150年前、日本人は欧米列強の植民地政策の波が押し寄せる中で、アジア諸国の中で 類を見ない成長の布石となる明治維新を成し遂げました。

欧米の外圧に対する危機意識、江戸幕府300年の太平下での制度疲労、商人の台頭に代表 される社会の価値観の変化等により休火山からマグマが一気に噴き出し活火山となったよ うな維新であったといえましょう。

海に面し進取の気風に富み、幕末の早い時期に列強との戦い等を通じて外国の力を痛感し、日本の行く末を真剣に考え、尊王攘夷から、言わば尊王和夷へと考えを変えた薩摩、会津盆地であくまでも家訓を守り徳川幕府に忠義を尽くし、既存の伝統、価値観を守り、日本の美学を貫いた会津、戊辰戦争における薩摩と会津の戦いはまさに価値観の戦いであり、その両藩の価値観は日本人の強い共感を得ています。

当時諸藩では程度の差こそあれ「人づくりは百年の計」との信念を持っていました。特に青少年の育成には積極的に取り組み、ここで育てられた人材が維新のマグマ噴火のエネルギー源となり縦横無尽に活躍しています。これらの諸藩の中で、特筆すべき人づくりシステムが薩摩の郷中教育と会津の什教育でした。

異年齢グループでの厳しい規範遵守と罰則、文武両道の鍛錬、これらは一見、画一的で個性のない人材を生み出す教育と誤解されがちです。しかし実は強い個性と創造力をもって自分で考えて行動する習慣を身につける教育手法であり、結果として両藩に強靭な人材と強い組織力をもたらしました。

AI、ロボット技術等の画期的な進歩とグローバル化の急激な進展による多様な文化、慣習、価値観、格差等が顕在化するこれからの社会においては、自主・自立心と豊かな想像力を持ち、社会、組織規範を守り、多様性を受け入れ、様々な価値観の人材の力を引き出し、更に調和させ、あたかもオーケストラの指揮者がハーモニーを醸し出すようなリーダーシップを発揮できる人財が不可欠です。

昭和 46 年から 49 年の第 2 次ベビーブームの時の出生率は 1.96、この頃生まれた子供たちも今は 40 代後半の働き盛り、 そして彼らには兄弟、姉妹がいるのが普通であり家庭や学校で自然と団体生活を行い、嫉妬や羨望、喜怒哀楽、競争、 助け合い等の感情や行動により団体生活に必要な資質を身に着けていました。

しかしながら、その後出生率は下降を続け今では 1.4 を上下し、10 家族のうちの 6 家族、 簡単に言えば学校のクラスの 半数以上が一人っ子の家庭で育ったこととなる。また、一人 っ子と関係するかは不明であるが結婚を望まない独身者の 増加が社会問題にもなってい る。 また 6 人に 1 人が貧困児童、新卒者の離職率に至っては 3 年以内に 3 人に 1 人という 危機的状況でもある。

一人っ子は家庭や地域を通じて、幼児期に習得すべき団体生活に必要な資質が十分に育たない傾向があります。 自分の部屋があり、オーディオやテレビがあり、携帯電話やスマートフォーンが普通にあり、友達とは SNS の LINE 等で結ばれている。 その LINE にすぐ返事しなければ仲間外れになり、いじめられる。 だからスマホをひと時も手放せない。すなわち、望めば与えられるから我慢することを知らない。 自分中心で他人に優しくすることのできない子たちが成長し、社会人になっているのが今の状況となっている。

小学生がクラスの同級生を学校で殺害する、子どもが親や祖父母を殺害する、親が子供を殺害する。 何とも信じられないことが起こる現代、子どもは家で1人で遊ぶ、コンピューターゲームに耽り、 バーチャルな世界に浸る。

そこでは社会性も協調性も必要ない、自分だけのバーチャルな世界であり、子供を取り巻く 社会環境は確実に変化しています。

子供は自然の中で、グループで遊びを作り、その遊びで遊び、そして更に面白い遊びに進化させる。

この遊びの中で集団のルールや人間関係、人の痛みを理解し健全な人間性を育み、 遊びを 進化させるなかで論理的な創造性の資質を涵養できるものではないでしょうか!



躾についても、昔は親や地域が子供を躾たが、最近の親や地域はどうなっているのかという 事例は後を絶ちません。 しかし、昔の親が躾に熱心だったかと言うと、必ずしもそうでは なかっただろうと思います。 昔の家は子沢山で、大家族を養うために寸暇を惜しんで働か ねばならず、 よって兄姉が弟妹を育て、地域が行儀作法を教育する素晴らしい教育システ ムが日本には存在していたのではないでしょうか!

この日本の教育システムの中で薩摩の郷中教育と会津の什教育は、同様の形態をとっており、特筆に値するものです。 薩摩の郷中教育は現在のボーイスカウトの原型となったとも言われています。 薩摩藩内には「郷中」と言う数十戸で構成された自治組織があって、 この組織内における異年齢の子供同士の間でのシステムでありました。

具体的には、6 歳から 10 歳までを小稚児(こちご)と呼び、11 歳から 15 歳の長稚児(おせちご)が生活全般を教え、 更にこの長稚児を指導するのは、15 歳以上の二才(にせ)と呼ばれる青年たちでした。(下図参照)

# 

# 薩摩の郷中教育・・・妙円寺参り

上の図はイベント時の郷中活動の状況ですが、通常は毎日早朝に一人で自分が教えを乞いたい年長者の家に行って、儒学や書道などの教えを受ける。 ・・・そして子供だけで集まり、車座になって朝学んだことを順番に発表する。 ・・決まった場所はなく、子どもが輪番で地区の家にお願いして集合場所を決めていたそうです。

教えを乞いに行った年長者の考え、レベルは当然バラバラであり、指導要綱がある訳でもなく、 考えが統一されているわけでもなかった。 発表する本人は教わったことを自分の考えとして発表する。 そして皆で考えを共有する。

ここで重要なことは子供同士でチェックし合うデベート重視の学習であったことです。 この対話重視の教育の中で特に重視されたのが「詮議(せんぎ)」という方法でした。 今でいう「ケーススタディ」であり、起こり得るけど簡単には答えが出ないような状況をい ろいろ"想定"し、 その解決策を皆で考え合う訓練です。 えば「殿様の用事で急いでいるが、早駕籠(はやかご)でも間に合わない。どうするか」とか、「殿様の命を受けて合戦中の味方の助太刀に出陣中、自分の砦が敵に襲撃された。 引き返して自分の砦を守るか?それとも自分の砦は見捨てて殿様の命に従うか?」とか、「道で侮辱された。どうするか」といった起こり得るリアルな設問を次々と挙げ、 各自が自分だったらどうするかを述べ、皆で議論する。いわゆる「ケーススタディ」であり、 想定外などと言う逃げは許されない責任を意識するための際限のない「イメージ訓練」でありました。

「詮議教育」は、戦国時代くらいまでは日本中で行なわれていたようです。 江戸時代になるまでは、公家や荘官や守護大名のようなごく一部のエリート以外は字を読めなかったので、一般的に武士は、戦(いくさ)の成功・失敗事例を文字でなく耳で学び、皆で議論し、実践的スキルを向上させる学習会を行なっていたと言われています。

また「義とは何か」といったテーマで議論を繰り返し、そうした日常生活の規範を、 それぞれが内面化していく道徳教育も行われていました。

道徳教育に関しては「日新公(じっしんこう)いろは歌」(日新公は島津の殿様)があり、大人になるまでに毎日毎日欠かさず唱え、自分の道徳観念として定着させたそうです。 ちなみに最初の「い」は「いにしえの道を聞きても唱えても わが行ないにせずばかいなし」であり、「どんな昔の教えを聞いても自分で実践しなければなんの意味もない」という意味であり、まさに実践的な教えです。

日新公いろは歌は、現代でも活用できる素晴らしいものですのでここに紹介します。→ こ こをクリック

薩摩の郷中教育は君主に忠義、親に孝行、下の者に慈悲という理念のもとで、 基本的には 年長者すなわち上位の者に責任を持たせるのが目的の教育であったと言えます。

また、現代の子供たちに欠けているのは山坂達者です。

山坂達者とは、年長の二才たちが稚児を引き連れて、山野を駆け巡り鍛錬するもので、 厳 しい山坂でも弱音を吐かないチャレンジ精神旺盛な逞しい子供を創り上げる遊びの訓練で ありました。 この 遊びの中では、小鳥の捕獲の方法や野ウサギやイノシシ等の獣を獲るた めの罠の作り方や 薬草・毒草の見分け方などを年長者が実地に教えます。

また、鹿児島には子供達の遊びの中に今でも引き継がれているスローガンがあります。 それは"泣コカイ、飛ボカイ、泣コヨカヒッ飛べ"であり、畑の段差や小川を移動するための掟でもあり、 泣いて許しを請い飛ばないか、泣くよりは失敗してもいいから飛んでしまえ、という教えであり この"ヒッ飛べ"の精神も、教室でのいじめを黙認する現在の子供達に必

### 要ではないでしょうか!

このように、薩摩の郷中教育、会津の什教育は判断力、決断力、実行力を伴う「知恵」を 身につけられた教育手法であり、正解、手順をテキストで身に着けさせるのではなく、

- ①あらゆる事態を仮想し、
- ②それに対処する行動方針やアイデアを考えだし、
- ③その中から正しいものを選択し、
- ④果敢に実行する度胸や覚悟を持たせる。

という素晴らしい教育システムであった。クライシスに対して想定外という言葉で逃げるのではなく、 クライシスに際して最適行動方針を瞬時に導き出し、果敢に対処できる人材が求められている今こそ必要な 教育手法ではないだろうか!なお、郷中教育の規約、掟は各地に残っており、それぞれ内容は異なるが、 全体を包括すると次のような項目です。

- ① 忠孝を重んじ、文武を励め。
- ② 礼儀をたしなみ、親睦、団結を心がけよ。
- ③ 山坂達者であれ。
- ④ 何事も詮議をつくせ、決まったら議をいうな、言い訳するな。
- ⑤ 嘘をつくな、弱音を吐くな、卑劣なことをするな。
- ⑥ 弱いものいじめをするな。
- (7) 目上を重んじよ、親に口答えをするな。
- ⑧ 女と交わるな。
- ⑨ 金銭を持つな、1人で買い物をするな。
- ⑩ 酒、煙草をのむな。
- ① 歌舞、音曲、芝居を見るな。
- ② 足袋、頭巾、襟巻きをするな、木綿を着れ。
- ⑬ 無刀で外出するな、脇差し1本で辻角を廻るな。
- (4) どんな場合でも刀は抜くな、抜いたらただでは鞘におさめるな。
- (5) 槍を持たせた役人には、礼をしろ。
- ⑯ 他家の果樹、壁、屋根に手をかけるな。

# 要約すると

- ① 忠孝、文武
- ② 礼儀、親睦、団結
- ③ 山坂達者
- ④ 詮議、議を言うな
- ⑤ 嘘をつくな
- ⑥ 弱いものいじめをするな

# ⑦ 目上、親に従え

等であり、

特に現代の子供たちに欠けているのは③の山坂達者です。

#### 会津の什教育とは

\_\_\_\_\_

#### 「什の掟」

- 一・年長者の言ふことに背いてはなりませぬ
- 二・年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
- 三・嘘言を言ふことはなりませぬ
- 四・卑怯な振舞をしてはなりませぬ
- 五・弱い者をいぢめてはなりませぬ
- 六・戸外で物を食べてはなりませぬ
- 七・戸外で婦人と言葉を交へてはなりませぬ

ならぬことはならぬものです

この什の掟が最も有名であるが、什の掟はグループごとに制定したルールであるため、グループによっては「什の掟」の内容は若干、異なっていたようである。

会津藩の上級藩士の子弟は、10歳になると会津藩校「日新館」に入学する。会津藩校「日 新館」に通う者は、身分(居住区)によって9班に分かれた。

なお、身分の低い中級藩士や下級藩士は、会津藩校「南学館」「北学館」に入学した。

日新館に入学する前の6歳から9歳の会津藩士の子共は、この9班に準じて9つの班を作り、10人程度の「什(じゅう)」というグループを形成していた。

什では、身分に関係なく、年長者(9歳)が什長(リーダー)になり、9歳の者が複数人居るときは、早生まれの者が什長となるのが慣例であった。

什では、身分や能力に関係無く、年功序列によって厳しく秩序が守られ、年少者が年長者よりも先に席を立つことも許されなかった。

什の子供達は、午前中は寺子屋などで素読を学び、午後からは天候に関係無く、1 カ所に集合し、什のグループで行動し、単独行動は許されなかったといわれる。

そして、一度集合すると什長が解散を宣言するまで、勝手に帰ることは許されなかった。 遠 方からの訪問者がある場合などは、両親が年長者に許可を得る必要があった。

什のメンバーは当番制で自宅の一室を提供することになっており、昼食が終わると、一室に集まった。当番に当たった家は、必ず夏は水を、冬は湯を出したが、お菓子や果物を出すことは禁じられていた。

子供達の集会を「遊び(什の遊び)」と言い、什長は什の遊びで「什の掟」を暗唱する。 これが「ならぬことはならぬものです」で有名な会津藩の「什の掟」であり、リーダーが「什 の掟」を暗唱することを「御話(お話の什)」といわれていた。

子供達が集まると、毎回、什長が「什の掟」を暗唱し、子供達はリーダーが1つ読み上げる ごとに、「はい」と返事してお辞儀した。

什長の御話(話しの什)は毎日、行われていたため、子供達はみな「什の掟」を記憶していた。

なお、什の掟は藤原正彦のベストセラー国家の品格でも紹介され、会津出身の衆議院議員の渡部恒三も度々引用したことから全国的にも知られるようになり、学校でのいじめなどが社会問題化する中、テレビドラマ「白虎隊」でも取り上げられ、教育関係者の注目も集めた。なお、最後の一節「ならぬことはならぬものです」から、NN運動が福島県を中心に展開されている。

#### 「什」の制裁

什長が「什の掟」を言い終えると、子供達に「什の掟」に反した者は居ないか尋ねる決まりとなっている。 このとき、「什の掟」に反した者を知っている者は、「何某が戸外で女性を話しておりました」などと告訴する。

すると、什長は告訴された者を中央に呼び、違反の事実を問いただす。違反が事実であれば、 罪の重さによって制裁が加えられた。

- 1・無念(むねん)の制裁…違反が軽い場合は、リーダーが「無念を立てなさい」と命じ、 違反者は各人に向かって「無念でありました」と言ってお辞儀して謝罪した。
- 2・竹篦(しっぺい)の制裁…竹篦とは「シッペ」のことで、罪が軽い場合には掌にシッペし、罪が重い場合は手の甲にシッペが行われた。

また、罪の重さによって回数が決められた。 シッペの制裁はリーダーの監視下で行われ、 仲の良い者が形式的にシッペするような場合は、即座にやり直しが命じられた。

3・派切る(派切り)の制裁…「派切る」とは絶交のことで、子供を仲間はずれ(村八分のようなもの)にする制裁で、制裁の中で1番重い制裁である。

この制裁を受けた者は、両親や兄に付き添いの元で、什長に謝罪しなければ、村八分の制裁 は解除されなかった。 これは、破廉恥な行為をするなどの重罪を犯さなければ適用される ことはなかった。

4・手炙りの刑…手炙りの刑とは、「什の掟」に背いた者(被告)の手を火鉢の上にかざし、 子供達が鼻の脂を指で被告の手に付けて溶かす刑罰である。例外的に行われていた。

5・雪埋めの刑…雪埋めの刑とは、「什の掟」に背いた者(被告)を雪に押し倒し、雪をかける刑罰である。この刑も例外的に行われていた。

会津日新館 HP による「什の教え」の説明

同じ町に住む六歳から九歳までの藩士の子供たちは、十人前後で集まりをつくっていました。この集まりのことを会津藩では「什 (じゅう)」と呼び、そのうちの年長者が一人什長 (座長)となりました。

毎日順番に、什の仲間のいずれかの家に集まり、什長が次のような「お話」を一つひとつみんなに申し聞かせ、すべてのお話が終わると、昨日から今日にかけて「お話」に背いた者がいなかったかどうかの反省会を行いました。

- 一、年長者(としうえのひと)の言ふことに背いてはなりませぬ
- 一、年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
- 一、嘘言(うそ)を言ふことはなりませぬ
- 一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
- 一、弱い者をいぢめてはなりませぬ
- 一、戸外で物を食べてはなりませぬ
- 一、戸外で婦人(おんな)と言葉を交へてはなりませぬ

ならぬことはならぬものです

※什により、一つ二つ違うところもありましたが(「戸外で婦人と言葉を交えてはなりませぬ」はすべての什にあったわけではないようです)、終わりの「ならぬことはならぬものです」は、どの什も共通でした。

そして、「お話」に背いた者がいれば、什長はその者を部屋の真ん中に呼び出し、事実の有無を「審問」しました。事実に間違いがなければ、年長者の間でどのような制裁を加えるか

を相談し、子供らしい次のような制裁を加えました。

# 一、無念(むねん)

一番軽い処罰です。みんなに向かって「無念でありました。」と言って、お辞儀をしてお詫びをします。「無念」ということは、「私は会津武士の子供としてあるまじきことをし、名誉を汚したことは申し訳がない、まことに残念であります。」という意味でした。

# 二、竹篦(しっぺい)

いわゆる「シッペ」です。制裁の重さに応じて、手のひらに加えるか又は手の甲に加えるか、 何回加えるかを決めました。

仲がいい相手だからと力を抜くものがいれば、什長は厳しく目を光らせ、すぐにやり直しを 命じました。

# 三、絶交(ぜっこう)

一番重い処罰です。これを「派切る(はぎる)」と言い、いわゆる「仲間はずれ」でした。 めったに加えられる罰ではありませんでしたが、一度「絶交」を言い渡された場合には、そ の父か兄が付き添い「お話」の集まりに来て、什長に深くお詫びをし、什の仲間から許され なければ、再び什の一員に入ることができませんでした。

# 四、その他

火鉢に手をかざす「手あぶり」や雪の中に突き倒して雪をかける「雪埋め」というような制 裁もありました。

子供にとって仲間たちから受ける審問は辛いものではありますが、「お話」も「制裁」もすべて大人たちに言われてつくったものではなく、子供たちが制約や強制を受けずに自分たち自身でつくり、「会津武士の子はこうあるべきだ。」ということを互いに約束し、励み合ったのです。